琉球列島出土彫画貝製品の製作技術に関する研究

山野　ケン陽次郎

1. 研究の目的

琉球列島において貝殻はその緻密な質感や色や形状における装飾性の高さから装身具として利用されてきた。これら貝製装身具の中には外形を打割や研磨によって整えるだけでなく、貝殻の表面を擦る、あるいは彫って文様を施すことで装飾性を高めたものが存在する。鹿児島県種子島に所在する広田遺跡出土の貝符にみられる饕餮文類似の文様が著名であり、このような製品は奄美諸島や沖縄諸島でも散見される。また近年、資料の増加により縄文時代並行期に貝製品への装飾行為が確認できるようになった。先行研究ではこれら文様の系譜や変遷の解明に向けての論考が充実している反面、その文様を施す加工方法や道具についての研究が不足している。文様の系譜や変遷を解明する上でも製作技術の検討が必要不可欠である。よって本論では琉球列島で出土する文様の施された貝製品（以下彫画貝製品）[1] を集成・分析し、全体像を把握する。また、遺物の加工痕の観察や製作実験によって加工具の推察を行い、琉球列島における彫画貝製品出現の意義について言及していく。

2. 彫画貝製品の研究略史と課題

彫画貝製品の研究は1950年代に行われた種子島広田遺跡の発見が契機となっている。広田遺跡では150体を超える埋葬人骨に大量の貝符が共伴した（国分・盛園1958）。貝符とは南海産の大型イモガイを板状に加工した貝製品で、抉りを入れて外形を整形した後、表面に装飾文様を施したものがある。広田遺跡では上層埋葬から穿孔のない貝符が、下層埋葬からは穿孔をもつ貝符が層位的に出土しており、前者が新しく後者が古いことが判明している（桑原編2003）。このうち下層貝符には中国の殷代に盛行した饕餮文に類似する文様が施されており全国的に注目を浴びた。文様は貝符を主体とし、ゴホウラ・イモガイ・オニニシ貝輪やマクラガイ珠に対しても施されており、一定の原則を保ちながらも様々なヴァリエーションが存在する。広田遺跡の発掘調査後、調査に携わった金関丈夫や国分直一はこれら饕餮文類似の文様や貝製装身具の形態、被葬者の埋葬方法などを根拠に大陸文化の波及を指摘した（金関1964、国分・盛園1958）。また、この際広田遺跡から出土した貝符に対し、初めて「彫画貝製品」の名称が用いられた。その後、新田栄治による貝符の文様系譜や時代観についての議論（新田1984、国分1992）、中園聡による文様の解釈や広田遺跡の文化起源についての論争が行われた（中園1992、国分1993）。また、新田や木下尚子は上層貝符の編年案を提示し（新田1984、木下1987）、中園は下層貝符から上層貝符の一連の文様変遷案を示すなど、1980年代には貝符を巡る系譜論や編年研究が進展した（中園1992）。そして近年、1950年代に発掘された広田遺跡の正式報告書が刊行され、その中で矢持久民枝による下層から上層を通しての貝符編年が提示されている（矢持2003）。このよ

うに広田遺跡の発見後、様々な研究者によって貝符の文様系譜やその変遷についての試案が示されてきた。しかし、これら文様の起源は判然としておらず、現在でも古代中国を起源とする考えが主流である。

貝製品に施される装飾行為を意識した論考が少ない中、木下は装飾文様の一種である列点文の施された貝製品の検討を行っており、琉球列島だけでなく本土の資料も含め、全国的な視野での考察を進めている（木下2000）。また中村直子は土層貝符の文様と奄美諸島を中心に分布する兼久式土器へ施された文様との比較研究を開始しており、その類似性や文様変化の画期を示すなど、彫画貝製品の研究は新たな局面に入ったといえる（中村2004）。ただし、管見のかぎり彫画貝製品の製作技術についての研究は確認できない。近年、筆者は投稿中の論考において広田遺跡の下層埋葬の再検討を行い7つの埋葬段階を設定した（図5）。この際、広田遺跡の系譜や変遷について先行研究とは異なる見解を示し、広田遺跡では第3段階と第4段階の間に大きな画期が存在しており、その変化の一つに貝符や貝輪に対する彫刻行為の出現があるとした。そしてこれら彫刻行為の出現を根拠に本土からの鉄器の搬入を指摘した（投稿中）。

以上のように彫画貝製品についての研究は広田遺跡出土貝符を中心とした文様系譜と機能、編年研究が主であり、その製作技術や製作道具の解明は一切なされていないのが現状である。文様の系譜を解明する場合、文様論に終始するだけでなく、その文様がどのような技術と道具を用いて施されたかを解明する必要がある。彫画貝製品の製作技術的検討を行うことは、広田遺跡の彫画貝製品登場の背景を解明する手掛かりになるだけでなく、琉球列島という島嶼地域に彫画行為が出現し展開していく意味を明らかにするのに役立つと考えられる。本論では先行研究とは視点を変えて彫画貝製品を製作技術的観点から検討していく。

3. 分析方法

3. 1　分析手順

先行研究では彫画貝製品についての製作技術的検討はほとんど行われてこなかった。よって本論ではまず彫画貝製品の集成を行い、基礎データを整理する。集成資料は貝製品の表面に彫画行為を施すものを中心とした。ただし、サメ歯状貝製品の縁辺に施される加工や紐通し用と判断できる溝状加工などについては、装飾文様でなくモチーフの外形の模造あるいは機能的加工であると判断し、集成資料には加えなかった。また、土層貝符については検討不足のため本論では扱わなかった。土層貝符の検討は別稿に譲りたい。

彫画貝製品の製作技術的検討を行う際、第一に文様の加工方法を明らかにする必要がある。そこでまず彫画貝製品に施される文様の加工痕を形態により分類する。その後、各時期の器種や貝種、加工痕や文様構成を概観し、製作道具や文様構成の変化について言及していく。そして貝製品への彫画行為が琉球列島の歴史上どのような意味を持つのかを考察する。

本論では沖縄貝塚時代の貝製装身具を主として扱うが、当該時期の琉球列島の時期区分は北限である種子島と沖縄諸島では異なるという問題点がある。よって、貝塚時代前期・中期を縄文時代並行期、貝塚時代後期を弥生・古墳時代並行期と統一し、時期を詳細にすべきものについては適宜本土で使用される時期区分を用いていく[2]。

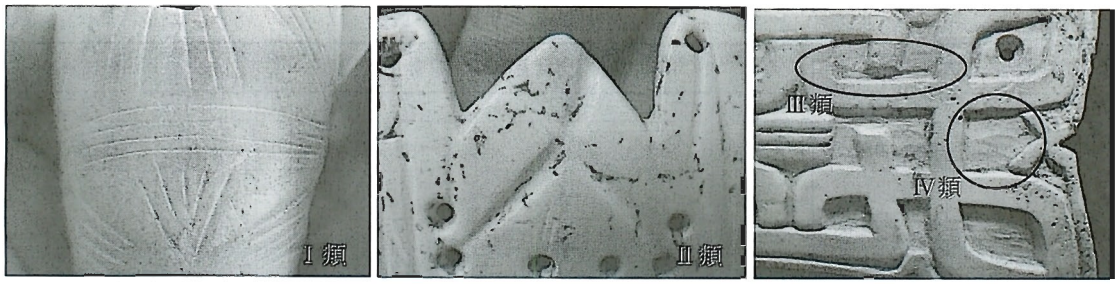


写真１　加工痕の観察写真
（Ⅰ類：摩文仁ハンタ原遺跡　Ⅱ類：二重兼久原貝塚　Ⅲ・Ⅳ類：広田遺跡）

3. 2　加工痕の分類

彫画貝製品に施される文様の加工痕を分類するにあたり、加工痕の詳細な観察を行った。琉球列島の彫画貝製品を観察すると加工痕の長さ・幅・深さ、先端形態、断面形態から大きく以下の４つに分けられる（写真１・図１）。

Ⅰ類：加工痕の幅が狭く、断面形態が浅く急なＶ字状、先端は両端ともすぼまる

Ⅱ類：加工痕の幅が広く、断面形態が深く緩やかなV･U字状、先端は両端ともすぼまる

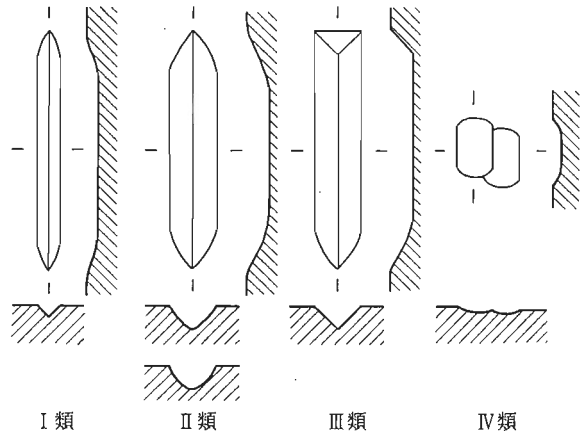


図１　加工痕の分類

Ⅲ類：加工痕の幅が狭いものと広いものがあり、断面形態が深く急なＶ字状、先端は片方がすぼまるが、もう片方の先端が急に落ち込む

Ⅳ類：加工痕の長さが短く、幅が広く、断面形態が浅く緩やかなＵ字状、先端は緩やかな弧状を呈するものやすぼまるものがある

上記の分類をもとに琉球列島出土彫画貝製品の概要をみていく。

4. 分析

4. 1　縄文時代並行期の貝製品

管見の限り、縄文時代の彫画貝製装身具は５点のみである（表１）。沖縄県恩納村熱田原貝塚では２点出土している。一つはゴホウラの外唇部を利用した貝製装身具である（図２：１）。一部が欠けており完形ではないが、半環状を呈する垂飾品と推定できる。当製品の縁辺部には２本ずつペアになった線文が７本施されている。二つ目はサラサバティの縁辺部を半環状に整形したものである（図２：２）。製品の縁辺部に７本の線文が連続的に施されている。これらの資料については実見できていないが、実測図と写真からは前者はⅠ類、後者はⅠ類あるいはⅡ類と判断できる。いずれも縄文時代後期並行期の資料である。

沖縄県糸満市摩文仁ハンタ原遺跡出土例はクロミナシに穿孔を施した装身具である（図２：３）。

表１　琉球列島出土彫画貝製品一覧表

遺跡名	所在	時期	出土状況	貝製品	貝素材	点数	加工痕				実見	文献
							Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ		
面縄第一貝塚	鹿児島県伊仙町	縄文後晩期	人骨付近出土	鎌状貝製品	シャコガイ科	1	○				○	伊仙町1985
真志喜安座間原第一遺跡	沖縄県宜野湾市	縄文後晩期	土壙内	タカラガイ製品	ウミウサギ	1	○				○	木下1996ｂ
熱田原貝塚	沖縄県南城市	縄文後期	包含層	半環状貝製品	ゴホウラ サラサバティ	2	△	△			×	大城編2002
摩文仁ハンタ原遺跡	沖縄県糸満市	縄文後晩期	集骨付近出土	イモガイ製品	クロミナシ	1	○				○	松下編2008
島ノ峯遺跡	鹿児島県中種子町	弥生終末～古墳	人骨共伴	貝符	イモガイ科	4		○	○		○	橋口編1996
				マクラガイ珠	マクラガイ科	2	○				○	
広田遺跡	鹿児島県南種子町	弥生終末～古墳	人骨共伴 表面採集	貝符	イモガイ科	107		○	○		○	桑原編2003 石堂他編007
				貝輪	オニニシ ゴホウラ イモガイ科	6		△	○	○	○	
				マクラガイ珠	マクラガイ科	95	○				○	
イヤンヤ洞穴	鹿児島県笠利町	縄文～古墳	包含層	貝符	イモガイ科	1		○			○	中山1992
サウチ遺跡	鹿児島県笠利町	弥生・古墳	表面採集	貝符	イモガイ科	1			○	○	○	河口他1978
喜念貝塚	鹿児島県伊仙町	縄文～古墳	表面採集	貝符	イモガイ科	1		○			○	新里・山野2008
屋鈍遺跡	鹿児島県宇検村	古墳	包含層	貝符	イモガイ科	1			○		○	鹿児島県2008
大堂原貝塚	沖縄県名護市	古墳	不明	貝符	イモガイ科	1			○	△	○	未報告
兼久原貝塚	沖縄県本部町	弥生・古墳	不明	マクラガイ珠	マクラガイ科	1			△		×	上原他編1977
ナガラ原東貝塚	沖縄県伊江村	古墳	包含層	貝符	イモガイ科	1			○		○	新里編2001
具志原貝塚	沖縄県伊江村	古墳	包含層	貝符	イモガイ科	1			○	○	○	盛本1985
宇堅貝塚	沖縄県うるま市	弥生？	不明	指輪状貝製品	イモガイ科	1		○			○	未報告
具志川城崖下埋葬址	沖縄県うるま市	弥生・古墳	包含層	マクラガイ珠	マクラガイ科	3		○			○	未報告
平敷屋トウバル遺跡	沖縄県うるま市	古墳	不明	貝符	イモガイ科	1			△	△	○	島袋編1996
二重兼久原貝塚	沖縄県読谷村	弥生・古墳	不明	貝符	イモガイ科	2		○			○	高宮・知念編2004
高知口原貝塚	沖縄県読谷村	弥生・古墳	不明	貝輪	ゴホウラ	1		○			○	高宮・知念編2004
				マクラガイ珠	マクラガイ科	1		○			○	
嘉門貝塚Ｂ	沖縄県浦添市	弥生・古墳	包含層	貝輪	イモガイ科	1		○			○	松川編1993
古座間味貝塚	沖縄県座間味村	古墳	表面採集	貝符	イモガイ科	1			○	△	○	岸本他編1982
北原貝塚	沖縄県久米島町	弥生・古墳	不明	貝符	イモガイ科	1		△			○	高宮・知念編2004
清水貝塚	沖縄県久米島町	弥生・古墳	包含層	貝符	イモガイ科	5			○	○	○	盛本編1989
				マクラガイ珠	マクラガイ科	3	△	○			×	

※「擦刻」「彫刻」の「○」は確認できるもの「△」実見していないため、もしくは風化しているため判然としないもの
※「実見」は筆者が実見したか否かで、「○」はしたもの「×」はしてないもの

製品表面には多数の直線を並列・屈曲させた左右対称の幾何学的文様が確認できる。加工痕の幅は狭く、断面形態は浅いＶ字状を呈しており、Ⅰ類と判断できる。集骨の近辺からの出土であり、遺跡から縄文時代並行期に盛行する貝製品や大山式土器の破片が出土していることから縄文時代後期並行期の資料と想定できる。

鹿児島県伊仙町面縄第一貝塚ではシャコガイ製の鎌状貝製品が出土している（図２：４）。当製品の文様は加工痕が非常に細い。また断面形態が浅いＶ字状を呈することからⅠ類に分類できる。文様構成は直線を３本並列し、約45°あるいは135°屈曲させることで幾何学的文様を築く。当製品の年代観については報告書では同一包含層中の出土土器から縄文時代後期から弥生時代中期とされている。一方、文様構成が広田遺跡出土イモガイ貝輪の文様の一部と共通するという理由から広田遺跡下層の時期、つまり古墳時代前半とする意見がある（新田1984）。ただし、このような鎌状を呈する貝製品は縄文時代後晩期並行期の土器が出土する沖縄県北谷町クマヤー洞穴遺跡や玉城村宇和川原半洞穴遺跡でも確認できる。また当製品に施された直線を数本並列、屈曲させた文様構成は読谷村吹出原遺跡

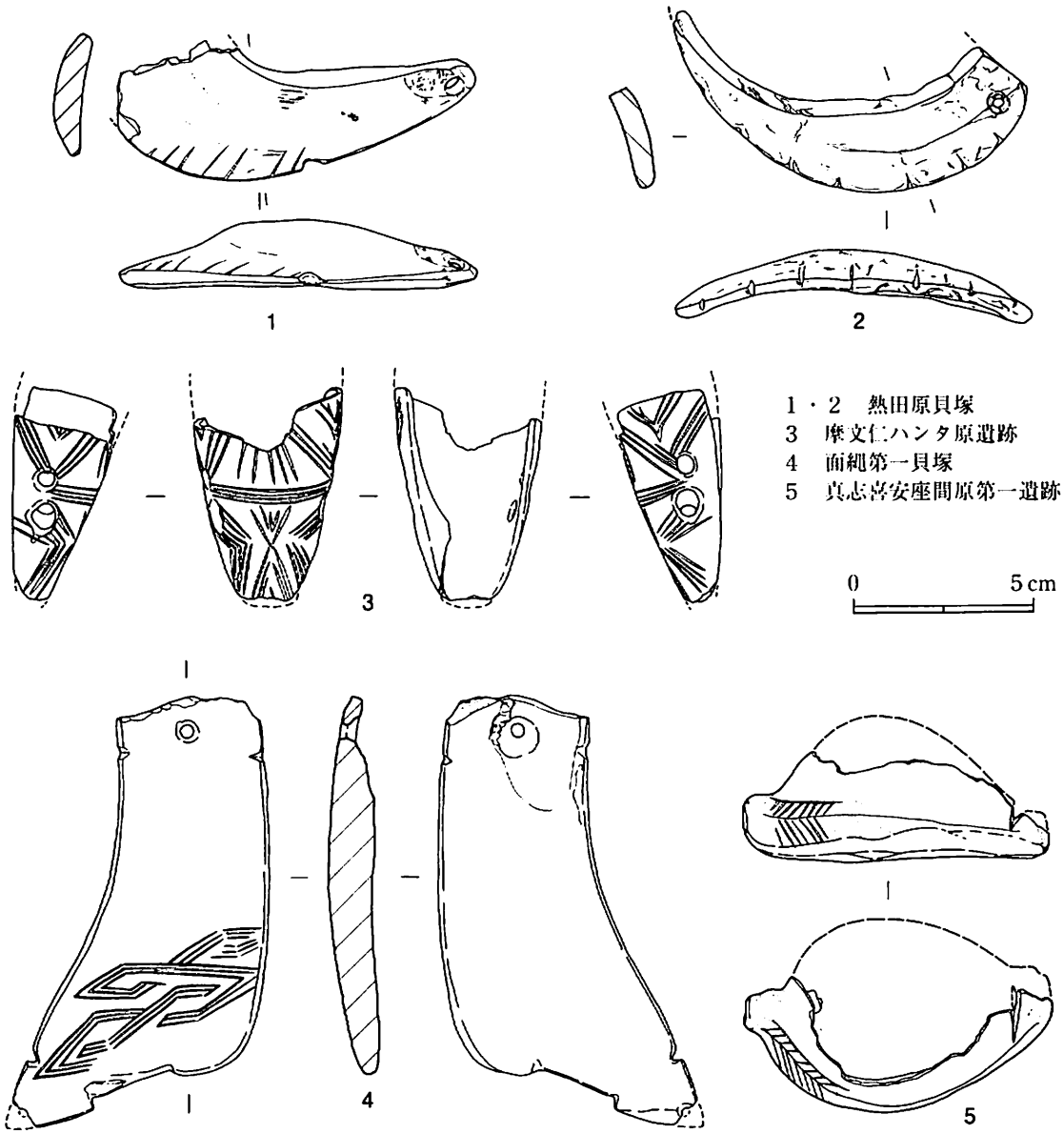


図2　縄文時代並行期の彫画貝製品

で出土する縄文時代後期並行期の蝶形骨器にみられる文様構成と酷似している点からも（仲宗根編1990）、その年代観は縄文時代後晩期並行期の可能性が高いと推定できる。

沖縄県宜野湾市真志喜安座間原第一遺跡のタカラガイ製品はウミウサギを使用したものである（図2：5）。土壙内から出土しており破片資料で全形は把握できないが、水管溝付近に溝状穿孔が施されることから装身具と推定できる。当製品の殻口部外側には中心および片側に軸線を持つ羽状文が確認できる。加工痕の幅は狭く、断面形態は浅く緩いV字状を呈していることから、Ⅰ類と判断できる。縄文時代晩期並行期の資料である。

以上のように縄文時代並行期の彫画貝製品は徳之島と沖縄本島で出土している。加工痕はⅠ類によるものが主体で比較的細く、いずれも直線を並列または屈曲させた文様が築かれている。また時期は全て縄文時代後・晩期並行期の可能性が強く、タカラガイ製品やイモガイ製品、シャコガイ製品など様々な貝種、器種が存在することがわかる。これらの製品の一部は日常的でなく特別な日に使用された装身具とも考えられている（大城編2002)。しかし、面縄第一貝塚や摩文仁ハンタ原遺跡の資料は穿孔の周囲に紐ずれ痕跡が確認でき、人骨の周囲で検出されていることからも、日常的に着用されており、被葬者を埋葬する際に一緒に埋納したとも考えられる。

4. 2　弥生・古墳時代並行期の彫画貝製品

琉球列島では弥生時代並行期のものと断定できる彫画貝製品が存在しない[3]。ただし、宇堅貝塚出土品については弥生時代並行期の可能性があるので詳細を述べる。宇堅貝塚ではマガキガイあるいは小型のイモガイ科を加工した指輪状貝製品が出土している（図３：１)。当製品は未報告のため詳細な時期は不明だが、山口県土井ヶ浜遺跡で貝種および形態的に類似する指輪状貝製品が数点出土しており、これらは弥生時代中期に比定されている（乗安1988)。よって宇堅貝塚の指輪状貝製品についても弥生時代並行期のものではないかと推定した。当製品は表面にⅡ類による左右対称の格子状の文様が施されている。このことから弥生時代並行期にはⅡ類による彫画貝製品が存在する可能性が高い。

さて、ここで古墳時代並行期の広田遺跡の様相についてみてみる。広田遺跡で出土する下層貝符を詳細に観察すると、状態の良好なものは加工の痕跡が非常に明瞭に残っていることがわかる。これらの文様には主としてⅢ類とⅣ類の２種類の加工痕が確認できる（図３：６、写真１：右)。このうちⅢ類は主に文様を構成する帯文を縁取るために施されている。またⅣ類は帯文と帯文の間の空間を何度も削ることで文様全体をより立体的にみせるように施されている。イモガイやオニニシ製の貝輪についても貝符と同様Ⅲ類あるいはⅣ類の加工痕が確認できる（図３：13)。ただし、マクラガイ珠の文様については線幅と断面形態からいずれの加工痕もⅠ・Ⅱ類と判断できる（図３：８)。これに対して、奄美・沖縄諸島でも古墳時代並行期の貝符が数点出土している。鹿児島県笠利町サウチ遺跡では破損した大形の貝符にⅢ類とⅣ類の２種類の加工痕が観察できる（図３：７)。また近年、宇検村屋鈍遺跡でも貝符が出土しておりⅢ類の加工痕がみられる（図３：10)。沖縄諸島では伊江村ナガラ原東貝塚（図３：11)、具志原貝塚、名護市大堂原貝塚、久米島町清水貝塚（図３：12)、座間味村古座間味貝塚などで貝符にⅢ類やⅣ類の加工痕が観察できる。いずれもⅢ類あるいはⅣ類を用いた曲線的かつ立体的な文様を施していることがわかる。

その他にはⅡ類による文様が笠利町イヤンヤ洞穴の貝符（図３：４)、読谷村二重兼久原貝塚出土の貝符（図３：２・３)、読谷村高知口原貝塚出土の貝輪（図３：５)、高知口原貝塚や清水貝塚のマクラガイ珠に確認でき（図３：９)、いずれも弥生・古墳時代並行期のものである。

以上のように弥生・古墳時代並行期の彫画貝製品は種子島から沖縄諸島まで広範囲で確認できる（表１)。弥生時代並行期にはⅡ類による文様が存在しており、直線を多用し、並列させるなどの特徴が認められる。また、古墳時代並行期になると広田遺跡では貝符や貝輪においてⅢ類やⅣ類による文様が、さらにマクラガイ珠にはⅠ類やⅡ類による文様が施されている。このような傾向は奄美・沖縄諸島でも同様で、貝符にⅢ類とⅣ類を用いた文様が、マクラガイ珠や貝符、貝輪の一部にⅠ類やⅡ類による文様が施されている[4]。これら古墳時代並行期の貝符や貝輪には弥生時代並行期以前にはな

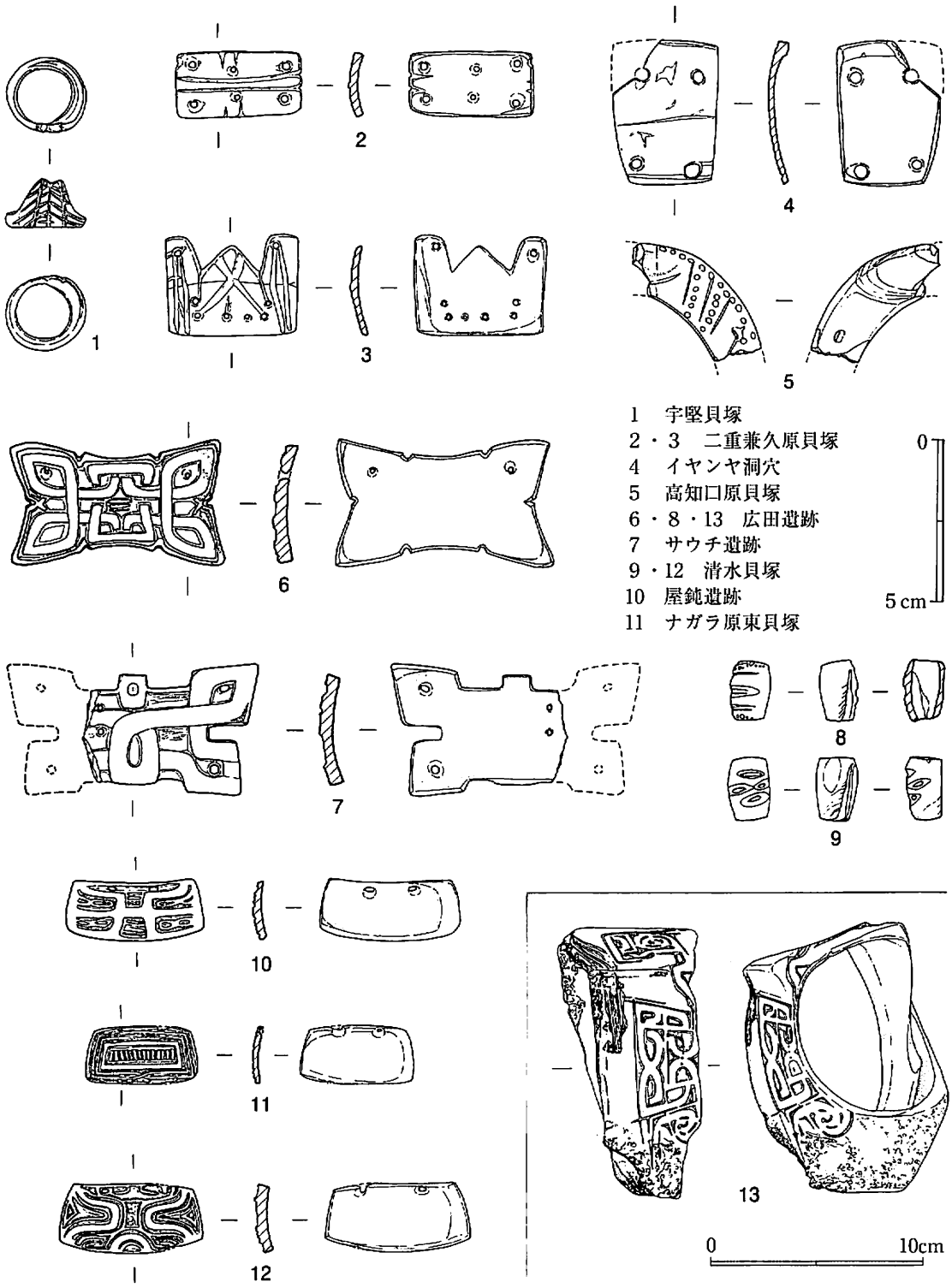


図3 弥生・古墳時代並行期の彫画貝製品

かった曲線的かつ立体的な文様が施されている。また縄文時代並行期と異なり、彫画貝製品の種類が特定されている。なかでも、広田遺跡において古墳時代並行期にⅢ類・Ⅳ類が登場することが注目される。

4. 3　製作技術の推察

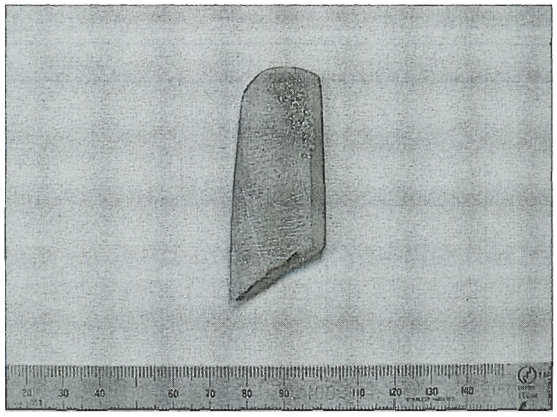
彫画貝製品について縄文時代並行期と弥生・古墳時代並行期のものをそれぞれ概観してきた。琉球列島では縄文時代後晩期併行期にはⅠ類が登場し、弥生時代並行期にはⅡ類が、さらに古墳時代並行期にはⅢ類とⅣ類が登場したことがわかる。次に、これらⅠ類からⅣ類の加工痕がどのような加工方法と道具によって施されたのか、遺物の観察と製作実験によって検証していく。

まずⅡ類については擦切りを行うための扁平な石器を用いて製品の表面を擦ることで施すことが可能だと考えられる（写真１：中央）。弥生時代並行期、琉球列島では貝輪や貝輪製作時の残欠品に擦切の痕跡が残ることが知られている（松川章編1993）。また、縄文時代並行期以降の貝製品に施される紐通し溝にもⅡ類に類似する加工痕が確認できる（松川章編1985）。Ⅱ類の溝は加工痕からもこれらと同様の方法・技術が使用されたと考えられる。しかし、Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ類の加工痕は同様の方法で施すことが困難と想定できる。とくにⅣ類は加工痕を詳細に観察すると、文様の非常に狭い範囲を何度も彫り込んでいる様子が確認でき、鋭利な利器、おそらく金属器によって彫刻したと考えられる（写真１：右）。またⅢ類についても狭い範囲へ彫り込みを行っており、擦切具では困難な曲線的な文様をスムーズに施している点や一方の先端が急に落ち込むことからもⅣ類と同じく金属製利器による彫刻であると考えられる（写真１：右）。そして、Ⅰ類は線幅が非常に細く、断面形態が急なＶ字状の加工痕であり、Ⅲ・Ⅳ類と同様に金属器の利用も考えられたが、琉球列島において縄文時代並行期に金属製利器は認められない。そこで、Ⅰ類については製作実験による検証作業を行った。

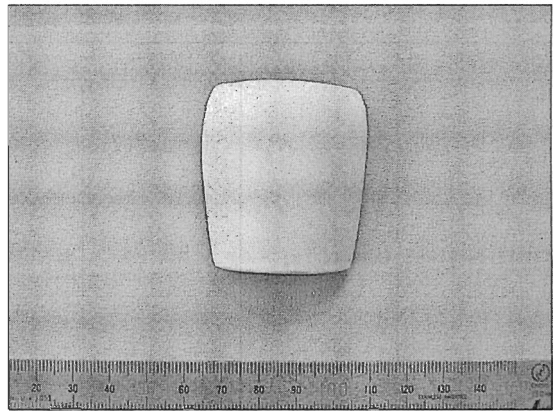
製作実験にあたり用意した道具は砂岩製の擦切具とイモガイ科のアンボンクロザメ製の板状製品である（写真２：１・２）。擦切具は奄美大島の海岸で採集した扁平な砂岩を砥石によって整形加工したものである。形態は沖縄市室川貝塚や伊仙町喜念クバンシャ岩陰墓などで出土する小型の扁平石器に似せた（立神・長野編1988）。これらの石器は扁平で端部に刃部を有しており、山崎純男によって擦切具としての用途が想定されている（山崎1999）。板状製品の素材であるアンボンクロザメは奄美大島の海岸で採集した死貝であり、方形に整形し原貝にみられる表面の斑点模様がなくなり、表面が滑らかになるまで砥石で研磨したものである。

実験ではイモガイ製板状製品に対して擦切具の刃部を垂直にあてがい、同一箇所を一定回数擦る作業を、回数を変更しながら複数回行いその加工痕を観察・比較した（写真２：３）。結果、回数が増えていくと、Ｖ字状の断面形態を維持しながらも加工痕が深く、広くなっていくことがわかった（写真２：４）。また、刃部の断面形態をＵ字状あるいは凸形にして擦ると、加工痕の断面形態がこれに対応して変化することがわかった。以上、断面形態がＶ字状の刃部をもつ扁平な石器を用いて、比較的少ない回数で擦ることにより、Ⅰ類のように幅が細く断面形態が急なＶ字状の溝を施すことが可能であることが判明した。また、実際にこの擦切具を用いて板状貝製品に対しての彫画行為を実施した。イモガイ製板状製品の表面を擦切具で擦ることで、面縄第一貝塚出土の彫画貝製品の文様の一部とほぼ同様の文様を施すことに成功した（写真２：５・６）。

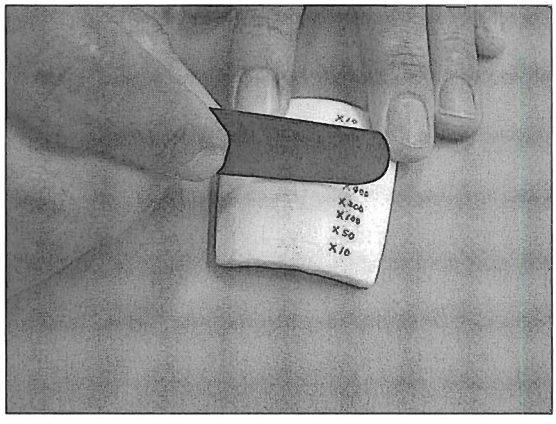
今回の実験により、擦り方の程度により加工痕の幅、深さが変化し、使用する石器の刃部形態に



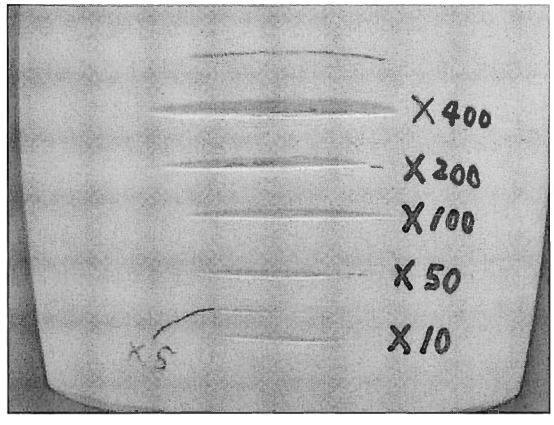
1　砂岩製擦切具



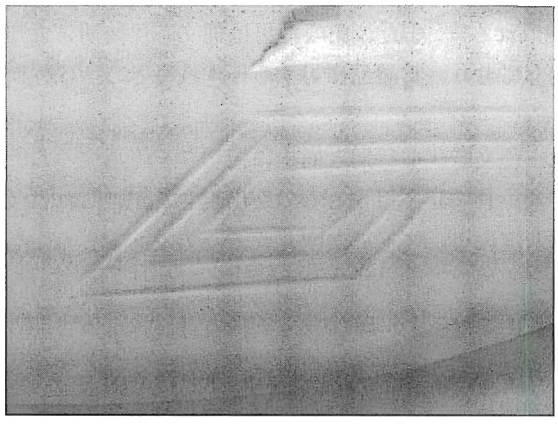
2　イモガイ製板状製品



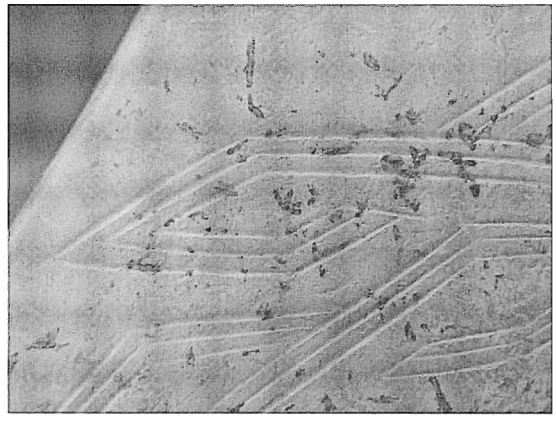
3　イモガイ製板状製品への擦刻行為



4　擦刻による加工痕（右の数字は擦った回数）



5　イモガイ製板状製品への実験による擦刻



6　貝製品への擦刻（面縄第一貝塚出土品）

写真２　擦切具による製作実験写真

表２　彫画具製品の変遷

時期	文様構成	加工痕	加工方法	加工具	貝種	器種
縄文並行期	直線的	Ⅰ・Ⅱ類？	擦刻	擦切具	シャコガイ科 イモガイ科 タカラガイ科 ニシキウズ科	不特定 ⇕ 限定的
弥生並行期		Ⅱ類？	擦刻？	擦切具？	マガキガイ or イモガイ科	
古墳並行期	曲線的 立体的	Ⅰ～Ⅳ類	擦刻 彫刻	擦切具？ 鉄製利器？	ゴホウラ オニニシ イモガイ科 マクラガイ科	

よって断面形態が変化することが明らかになった。また実際に擦切具で貝殻への文様を施したところ、実物とほぼ同様の文様を施すことが可能であることがわかった。よって、Ⅰ類およびⅡ類は擦切具による加工痕であると判断できる。以下、Ⅰ類・Ⅱ類を「擦刻」[5] による加工痕、Ⅲ類・Ⅳ類を「彫刻」による加工痕として認識し、考察に移る。

5. 考察

分析で得た結果をまとめると、彫画貝製品の文様構成や製作技術は表２のように変化していったことがわかる（表２）。琉球列島では縄文時代後晩期並行期には貝製品に対する擦刻行為が開始される。製作実験により、これら擦刻は擦切具によるものであることが判明した。使用された擦切具としては伊仙町の喜念クバンシャ遺跡やうるま市古我地原貝塚、沖縄市室川貝塚などから出土している扁平な小型石器が想定できる（図４）。近年、これらの石器については仲宗根求による類例の集成が行われており、素材・製作技法・形状の観点からひとつの型式として捉えることができるとし、「熱田原型石器」の提唱がなされている（仲宗根2009）。熱田原型石器は琉球列島では縄文時代後期並行期には出現しており、彫画貝製品の出現とも整合性が見て取れる[6]。また、山崎純男は縄文時代後期に九州から琉球列島へ擦切技法が導入された可能性を想定しており、貝製品に対する製作技術との関係性が指摘されている（山崎1999）。

続く弥生時代並行期に登場する擦刻による文様は、縄文時代並行期と同様に擦切りを応用することで施せたと考えられる。縄文時代と異なり、幅広で深いU字状を呈するものが出現するが、これは製作実験で示したとおり擦切具の刃部形態や擦り方の程度によって形態が変化するためである。ただし、弥生時代並行期以降には熱田原型石器は消失しており、鉄器などの代替品の登場の可能性もある（仲宗根2009）。しかし、当該時期に該当する鉄器は出土しておらず、異なるタイプの石器による可能性も捨てきれない。加工道具にどのようなものが用いられたのかは今後の検討課題といえる。

古墳時代並行期に入ると種子島広田遺跡を筆頭に、琉球列島で彫刻行為が認められるようになる。これらの彫刻は擦切具では施すことができず、鉄製利器の存在をうかがわせる。縄文・弥生時代並行期には擦刻による彫画行為が認められるが、その文様構成は線刻を多用した非常に直線的なものが多かった。しかし、古墳時代並行期になると彫刻による彫画行為が開始されており、その文様は曲線を多用した立体的文様構成に変化している。彫画貝製品の文様構成の変化と本論で想定した製作技術の

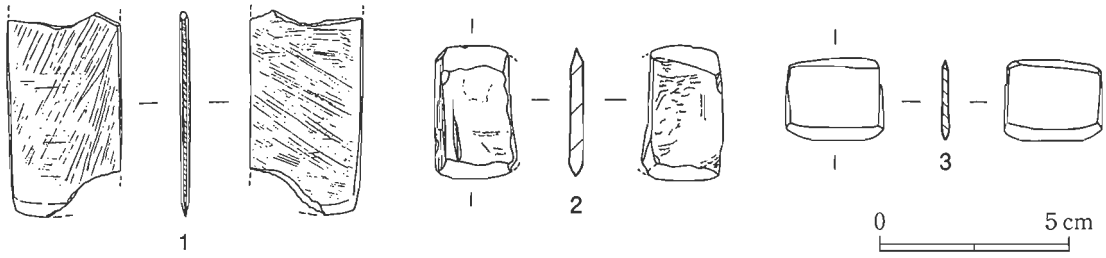


図4　琉球列島出土の擦切具（1：喜念クバンシャ岩陰墓　2・3：室川貝塚）

変化の画期が重なることが注目される。研究史で述べたように筆者は別稿にて広田遺跡第4段階における鉄器の流入を示唆した（投稿中）。前段階の第3段階には、マクラガイ珠に対する擦刻による線刻や貝符に対する擦刻による紐通し溝が確認できるだけで、貝符や貝輪に対する彫刻行為は認められない（図5：第3群）。これに対して第4段階には貝符や貝輪への彫刻行為が開始されるようになる（図5：第4群）。古墳時代前期前半～後半にあたるこの段階は広田遺跡と本土との交流が活発化したと考えられる段階であり（木下1996a）、琉球列島側の供給物である南海産貝殻に対して本土側が交易品として鉄製利器を広田遺跡に搬出した可能性も考えられる。また、彫刻の施された貝製品は奄美・沖縄諸島でも数点確認できる。これらはその型式から古墳時代並行期と考えられ、その存在によって奄美・沖縄諸島への鉄器の搬入、もしくは鉄器による彫刻の施された貝符そのものの流入がうかがえるのである。彫刻を施しえる鉄器の種類としては鉋や刀子などの利器があげられるが、現在のところ古墳時代並行期の確実な出土例は琉球列島にはなく、判然としない（大城2007）。ただし、弥生時代並行期以降、板状鉄斧や袋状鉄斧などの鉄器が出現しており、今後の調査による発見が期待できる（木村編2002）。

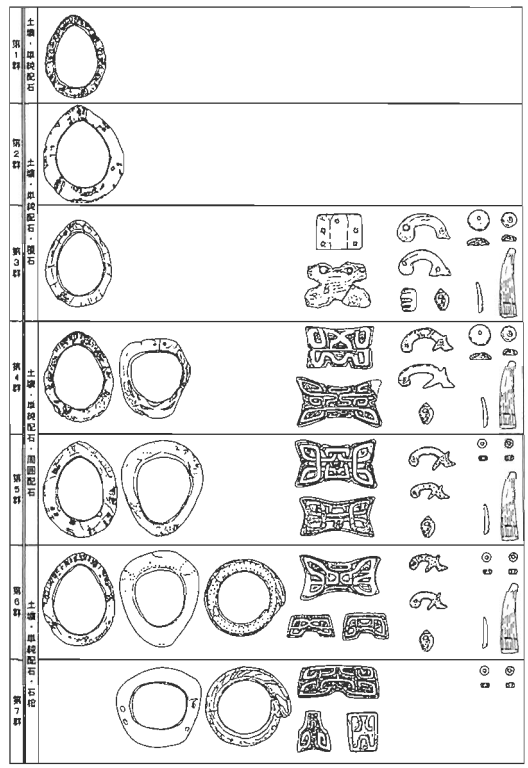


図5　広田遺跡の埋葬群図（投稿中一部改変）

6. 結語

本論では琉球列島で出土する彫画貝製品について集成し、加工痕の観察と製作実験によって製作技術の推察を行った。結果、縄文時代後期並行期には擦切具による直線的文様を施す彫画行為が開始され、製作実験により加工道具には端部に刃部をもつ扁平な石器を推定することができた。また、古墳時代並行期には種子島広田遺跡にて曲線的かつ立体的な彫刻行為が開始され、その加工具には加工痕の観察により鉄製利器を想定することができた。以上のことから、縄文時代後期並行期に琉

球列島で擦切技法が盛行する可能性と古墳時代並行期における本土からの鉄器の搬入の可能性を示した。

製作技術のうち擦刻の加工方法や加工道具は実験により明らかにできたが、彫刻については遺物の観察のみで、実験による証明の手順を踏むことなく結論を下した点が注意される。また、今回は貝製品の中でも資料を一部の機種に限定したが、今後は貝製品全体あるいは骨角器など彫画行為の確認できる他の遺物についても扱い、総合的に研究する必要がある。

琉球列島において貝は長期間にわたり様々な道具に加工・使用されてきた。貝製品の製作技術的研究は他地域からの技術の導入や道具の搬入、生業の発展など様々な観点に結びつけることが可能である。今後は琉球列島における基礎資料をまとめながら、本土や大陸を含めたより広い視野での研究を続けていきたい。

謝辞

本稿は2009年１月、熊本大学文学部に提出した修士論文の一部をまとめ直したものである。執筆にあたり熊本大学の甲元眞之、木下尚子、杉井健の各先生には多大なご指導を賜りました。また、多くの方々に協力またはご意見をいただきました。末筆ながら感謝申し上げます。

大城一成、大城剛、鐘ヶ江賢二、神川めぐみ、呉屋義勝、仲宗根求、中村直子、中山清美、東和幸、肱岡隆夫、宮城伸一、奄美市歴史民俗資料館、糸満市教育委員会、うるま市教育委員会、鹿児島県立埋蔵文化財センター、鹿児島県立歴史資料センター、鹿児島国際大学博物館、宜野湾市立博物館、久米島自然文化センター、読谷村教育委員会（五十音順・敬称略）

註

1）彫画貝製品という名称は国分・盛園1958の中で貝符の名称の一つとして用いられたものであるが、貝符以外にも表面に装飾文様の施される貝製品が存在するため、本論ではそれらを総称して彫画貝製品と呼称する。

2）縄文時代並行期の土器編年は高宮1993に、弥生・古墳時代並行期の土器編年は新里2004に準ずる。

3）琉球列島では弥生・古墳時代並行期、砂丘上に遺跡が形成されることが多く包含層が安定しない。また貝塚時代後期土器編年も一型式が長期の時間幅をもち、同一包含層中から各型式が出土するため、細かい時期設定が困難である。

4）ただし、兼久原貝塚出土のマクラガイ珠についてはⅢ類による文様が施されている可能性がある。資料を実見できていないためここでは指摘のみにとどめる。

5）「擦刻」という言葉は一般的に用いられる用語ではないが、貝殻体層を彫ることで文様を施す「彫刻」と区別するため、この用語を採用する。

6）ただし、古我地原貝塚では面縄前庭式を主体とする包含層から擦切具の一種と考えられる石器が出土しており、注意が必要である。

引用・参考文献

秋山美佳　2005「紫金山古墳出土貝輪の文様と形態」『紫金山古墳の研究－古墳時代前期における対外交渉の考古学的研究－』pp. 315－330　京都大学大学院文学研究科

石堂和博・徳田有希乃・山野ケン陽次郎編　2007『広田遺跡』南種子町教育委員会

上原静・岸本義彦・知念勇他　1977『兼久原貝塚』本部町文化財報告書第1集　本部町教育委員会
牛ノ浜修・堂込秀人編　1983『面縄第1・第2貝塚』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書（1）伊仙町教育委員会
大城　慧　2007「沖縄貝塚時代後期出土の鉄器について」『南島考古』№26　pp. 81－96　沖縄考古学会
大城秀子編　2002『熱田原貝塚』知念村文化財調査報告書第10集　知念村教育委員会
大呑善晃　1994a「貝符－遺物と伝承よりみた太古の宇宙－（前編）」『東南アジア考古学会』第13号　東南アジア考古学会　pp. 214－241
大呑善晃　1994b「貝符－遺物と伝承よりみた太古の宇宙－（後編）」『東南アジア考古学会』第14号　東南アジア考古学会　pp. 121－151
沖縄県立博物館編　1997『考古学資料より見た沖縄の鉄器文化』沖縄県立博物館
小田富士雄　2000「沖縄の『弥生時代』と外来遺物」『高宮廣衛先生古稀記念論集　琉球・東アジアの人と文化』pp. 95－109　高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会
小畑弘己・盛本勲・角縁進　2004「琉球列島出土の黒曜石製石器の科学分析による産地推定とその意義」『石器原産地研究会会誌』pp. 101－136　石器原産地研究会
金関丈夫　1964「種子島広田遺跡の文化」『発掘から推理する』pp. 94－115　朝日新聞社
上村俊雄　2007「総論　九州と南島との文化交流について」『考古学ジャーナル』№564　pp. 3－5　ニューサイエンス社
河口貞徳・出口浩・本田道輝　1978「サウチ遺跡」『鹿児島考古』12号　pp. 1－159　鹿児島県考古学会
岸本義彦他編　1982『古座間味貝塚』沖縄県文化財調査報告書第43号　沖縄県教育委員会
木下尚子　1987「貝符」『弥生文化の研究』第8巻　pp. 198－206　雄山閣
木下尚子　1992「南島出土の貝符文様の系譜」『考古学ジャーナル』№352　pp. 8－14　ニューサイエンス社
木下尚子　1996a「第2章　古墳時代の貝釧・貝の道－3～8世紀の南島交易」『南島貝文化の研究・貝の道の考古学』pp. 273－357　法政大学出版会
木下尚子　1996b「第3章　貝と葬送習俗－沖縄県真志喜安座間原第一遺跡の報告から」『南島貝文化の研究・貝の道の考古学』pp. 449－477　法政大学出版会
木下尚子　2000「八丁鎧塚1号墳スイジガイ・ゴホウラ釧について」『長野県史跡　八丁鎧塚』pp. 49－63
木下尚子　2003「貝製装身具からみた広田遺跡」『広田遺跡発掘調査報告書』pp. 329－366　広田遺跡学術調査研究会・鹿児島県立歴史資料センター黎明館
木下尚子　2004a「種子島の貝製品・貝文化」『考古資料大観　12　貝塚後期文化』pp. 242－254　小学館
木下尚子　2004b「南島と大和の貝交易」『考古資料大観　12　貝塚後期文化』pp. 250－254　小学館
木村龍生編　2002『ナガラ原東貝塚4』考古学研究室報告第37集　熊本大学文学部考古学研究室
桑原久男編　2003『広田遺跡発掘調査報告書』広田遺跡学術調査研究会・鹿児島県立歴史資料センター黎明館
国分直一・盛園尚孝　1958「種子島南種子町広田の埋葬　遺跡調査概報」『考古学雑誌』第43巻　三号　pp. 1－31　日本考古学会
国分直一　1972「南島における彫刻骨器と貝器－特に呪術的意義をもつと見られる装着品」『日本民族文化の研究　考古民族叢書』7　pp. 270－286　慶友社
国分直一　1992「種子島広田埋葬遺跡上層の貝符の彫文をめぐる問題－新田栄治教授の批判に答えて－」『古代文化』4　VOL. 44　pp. 189－207　（財）古代学協会
国分直一　1993「種子島広田遺跡出土貝符の『山』字彫刻をめぐって－中園聡氏の批判に答えて－」『古

代文化』12　VOL.45　pp.1－13（財）古代学協会
島袋洋編　1996『平敷屋トウバル遺跡－ホワイトビーチ地区内倉庫建設工事に伴う緊急発掘調査報告書－』沖縄県文化財調査報告書第125集　沖縄県教育委員会
島袋春美編　1987『古我地原貝塚』沖縄県文化財調査報告書第84集　沖縄県教育委員会
島袋春美　1991「いわゆる蝶形骨製品について」『南島考古』No11　pp.1－20　沖縄考古学会
島袋春美　2004「貝種別に見る奄美・沖縄諸島の貝製品」『考古資料大観　12　貝塚後期文化』pp.223－230　小学館
島袋春美　2005「蝶形骨器の成立と形態変遷－追加資料を加えて再検討－」『第15回九州縄文研究会沖縄大会　九州の縄文時代装身具』pp.35－43　九州縄文研究会・沖縄大会実行委員会
新里亮人編　2001『ナガラ原東貝塚3』考古学研究室報告第36集　熊本大学文学部考古学研究室
新里亮人・山野ケン陽次郎　2008「徳之島伊仙町喜念浜採集の貝製品について」『南島考古だより』第84号　沖縄考古学会
新里貴之　1999「南西諸島における弥生並行期の土器」『人類史研究』11　pp.75－106　人類史研究会
新里貴之　2004「沖縄諸島の土器」『考古資料大観12　貝塚後期文化』pp.203－212　小学館
高宮廣衛　1993『沖縄縄文土器研究序説』第一書房
高宮廣衛・知念勇編　2004『考古資料大観12　貝塚後期文化』小学館
立神次郎・長野真一編　1988『喜念原始墓・喜念クバンシャ遺跡・喜念クバンシャ岩陰墓』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書（7）伊仙町教育委員会
仲宗根求編　1990『吹出原遺跡』読谷村文化財調査報告書第9集　沖縄県・読谷村教育委員会
仲宗根求　2009「熱田原型石器の提唱－アッズ・ブレイドの類例資料－」『廣友会誌』第5号
中園　聡　1992「これは山の字ではない－考古学的解釈の性質に関して－」『人類史研究』第8号　pp.17－36　人類史研究会
中村友昭　2007「古墳時代の文化交流」『考古学ジャーナル』No.567　10月臨時増刊号　pp.21－25　ニューサイエンス社
中村友昭　2008「第6章　岡崎18号墳2号地下式横穴墓出土の貝釧」『大隅串良岡崎古墳群の研究』pp.243－256　鹿児島大学総合研究博物館
中村直子　2004「貝符に類似する土器文様の検討」『東南アジア考古学会研究報告　島嶼地域の諸相』第2号　pp.19－30　東南アジア考古学会
中山清美　1992「奄美における貝符と兼久式土器」『奄美学術調査記念論文集』南日本文化研究所叢書18　pp.165－173　鹿児島短期大学付属　南日本文化研究所
西園勝彦編　2009『屋鈍遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（143）鹿児島県立埋蔵文化財センター
新田栄治　1984「薩南・奄美・沖縄諸島出土の貝符と文様」『鹿大考古』第2号　pp.69－75　鹿児島大学法文学部考古学研究会
新田栄治　1991「貝符紋様の型式学」『交流の考古学』pp.331－345　肥後考古学会
新田重清　2000「沖縄縄文時代主要遺跡から出土する石器の様相について」『琉球・東アジアの人と文化（上巻）高宮廣衛先生古稀記念論集』pp.1－30　高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会
乗安和二三編　1982『土井ヶ浜遺跡　第7次発掘調査概報』豊北町埋蔵文化財調査報告第2集　豊北町教育委員会
乗安和二三　1988「弥生時代の指輪－土井ヶ浜遺跡出土の貝製指輪をめぐって－」『日本民族・文化の生成　永井昌文教授退官記念論文集』pp.499－517　六興出版

橋口達也編　1996『鳥ノ峯遺跡』中種子町埋蔵文化財調査報告書（2）中種子町教育委員会・鳥ノ峯遺跡発掘調査団

比嘉賀盛・宮里信勇・中村直樹・宮城利旭編　1997『室川貝塚』沖縄市文化財調査報告書第20集　沖縄市教育委員会

松川章編　1985『阿良第二貝塚』沖縄県教育委員会

松川章編　1993『嘉門貝塚B』浦添市文化財調査報告書第21集　浦添市教育委員会

松下孝幸編　2009「沖縄県糸満市摩文仁ハンタ原遺跡発掘調査報告（1）」『土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム　研究紀要』第4号　pp. 4－58

盛本　勲　1985「貝製品」『伊江島具志原貝塚の概要』沖縄県文化財調査報告書第61集　pp. 35－39　沖縄県教育委員会

盛本勲編　1989『清水貝塚』具志川村文化財調査報告書第1集　沖縄県具志川市教育委員会

山崎純男　1999「東アジア新石器時代の擦切技法」『日韓新石器時代交流研究会　第3回鹿児島大会資料集』pp. 33－54　九州縄文研究会

山野ケン陽次郎　「古墳時代貝交易研究序説―種子島広田遺跡の再検討―」投稿中

矢持久民枝　2003「広田遺跡出土貝符の検討－その分類と編年－」『広田遺跡発掘調査報告書』pp. 311－328　広田遺跡学術調査研究会・鹿児島県立歴史資料センター黎明館

図・写真・表の掲載

写真1：筆者作成（左は糸満市教育委員会にて撮影　中央は読谷村立歴史民俗資料館にて撮影　右は鹿児島県歴史資料センター黎明館にて撮影）図1：筆者作成　表1：筆者作成　図2：筆者作成（1・2は大城編2002をトレース　3は糸満市教育委員会にて実測後トレース　4は伊仙町教育委員会資料を実測後トレース　5は木下1996bをトレース）図3：筆者作成（1はうるま市教育委員会にて実測後トレース　2・3・5は読谷村立歴史民俗資料館にて実測後トレース　4・7は奄美市教育委員会にて実測後トレース　6・8・13は桑原編2003をトレース　9は盛本編1989をトレース　10は鹿児島県埋蔵文化財センターにて実測後トレース　11は新里編2001をトレース　12は久米島自然文化センターにて実測後トレース）　写真2：筆者作成　表2：筆者作成　図4：筆者作成（1は立神・長野編1988　をトレース　2・3は比嘉他編1997をトレース）図5：投稿中のものを縮小・一部改変

A study on the curving technology of The sculpted shell artifact in Ryukyu Islands

YAMANO Kenyojiro

By the main subject, I collected The sculpted shell artifact in Ryukyu Islands. And I thought curving technology based on the processing trace and production experiment. As a result, a sculpture act to give a linear pattern by the act of cutting by rubbing that was started in the parallel Late Jomon period. And I concluded the processing tool is the flat stone implement which owns the blade part in the end through production experiment. And the curvilinear, three-dimensional sculpture is started at Hirota site in the parallel Kofun period. I thought the processing tool is the iron tool by the observation of the processing trace. From these, I showed possibility that development of the Cutting by rubbing technique in the parallel Late Jomon period and import of the iron from kyusyu in the parallel Kofun period in Ryukyu Islands.